

◎内閣訓令第八号

各 官 庁

「現代かなづかい」の実施に関する件

国語を書きあらわす上に、従来のかなづかいは、はなはだ複雑であつて、使用上の困難が大きい。これを現代語音にもとづいて整理することは、教育上の負担を軽くするばかりでなく、国民の生活能率をあげ、文化水準を高める上に、資するところが大きい。それ故に、政府は、今回国語審議会の決定した現代かなづかいを採択して、本日内閣告示第三十三号をもつて、これを告示した。今後各官庁においては、このかなづかいを使用するとともに、広く各方面にこの使用を勧め、現代かなづかい制定の趣旨の徹底するように努めることを希望する。

昭和二十一年十一月十六日

内閣総理大臣 吉 田 茂

◎内閣告示第三十三号

現代国語の口語文を書きあらわすかなづかいを、次のように定める。

昭和二十一年十一月十六日

内閣総理大臣 吉 田 茂

現代かなづかい

まえがき

一、このかなづかいは、大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。
一、このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに適用する。
一、原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。

発 音 新 考
づ 音 づ かな かな かな かな かな かな かな かな かな かな
か い 備 考 (旧かなづか
いを示す)

イ	い	ゐ
エ	え	ゑ
オ	お	を
カ	か	くわ
ガ	が	ぐわ
ジ	じ	ぢ

(発音) 新かな備 考 (旧かなづか) (いを示すか)

ズ 新かな備 づ
ワ いわはづ
イ いひはづ
ウ おうふはづ
オ おおふはづ
エ えおふはづ
オ おおふはづ

発音 二 新かな備 考 (旧かなづか) (いを示すか)

ユウ ゆういふ、ゆふ
オオ おおあう、わう、あふ、ほう
コオ こうかう、くわう、かふ、こふ
ゴオ ごうがう、ぐわう、がふ、ごふ
ソオ そうさう、さふ
ゾオ ぞうざう、ざふ
トオ とうたう、たふ
ドオ どうだう
ノオ のうなう、なふ、のふ
ホオ ほうほう、はふ、ほふ
ポオ ぽうぽう、ぼふ、ほふ

モオ もうまう
ヨオ ようやう、えう、えふ
ロオ ろうらう、らふ

三

発音 三 新仮名備 考 (旧かなづか) (いを示すか)

キユウ きゅう、きふ
ギユウ ぎゅう、ぎふ
シユウ しゅう、しふ
ジュウ じゅう、じふ、ぢゅう
チュウ ちゅう、ちう
ニユウ にゅう、にふ
ヒユウ ひゅう、ひう
ビユウ びゅう、びう
リュウ りゅう、りふ

四

発音 四 新かな備 考 (旧かなづか) (いを示すか)

キョウ きょう、きう、けふ
ギョウ ぎょう、げう、げふ
ショウ しょう、せう、せふ
ジョウ じょう、ぢやう、ぜう、でう、でふ
チョウ ちょう、てう、てふ

ニヨオ によう ねう
 ヒヨウ ひよう ひやう、へう
 ビヨウ びよう びやう、べう
 ミヨオ みよう みやう、めう
 リヨオ りよう りやう、れう、れふ

細則

第一、ゐ、ゑ、をはい、え、おと書く。ただし助詞のをを除く。

例

一、ゐをいと書くもの
 いど(井戸) いのしし(猪) くわい(慈姑) あい(藍)
 まいる(参る) いる(居る) いびよう(胃病)
 けんい(権威) いち(位置) いさん(遺産)
 いにん(委任) たいい(大尉) くいき(区域)
 しょくいん(職員) びよういん(病院)
 よいん(余韻) すいどう(水道) すいさつ(推察)
 すいじ(炊事) すいじゃく(衰弱) すいぶん(随分)
 いっつい(一對) ゆいごん(遺言) しんるい(親類)
 二、ゑをえと書くもの
 こえ(声) つえ(杖) すえ(末) うえる(植ゑる)
 すえる(据ゑる) えとく(会得) ちえ(智慧)

三、

ををおと書くもの
 えこう(回向) このえ(近衛) ちようえつ(超越)
 えんきん(遠近) こうえん(公園) けんえん(犬猿)
 いちえん(一元) ぎよえん(御苑) えんさ(怨嗟)
 えんじよ(援助) えんざい(冤罪)

おけ(桶) おか(岡) うお(魚) とお(十)

おどる(踊る) おしえる(教へる) しおれる(萎れる)
 おしい(惜しい) おかしい(をかしい) あおい(青い)
 おめい(汚名) おかん(悪寒) ろうおう(老翁)
 かおく(家屋) おんど(温度) へいおん(平穩)
 くおん(久遠) おんりょう(怨霊)

例

第二、くわをかと書くもの
 くわ(か)と書くもの
 かがく(化学) かへい(貨幣) かふん(花粉)
 けっか(結果) かし(菓子) かこ(過去)
 かがく(科学) かし(火事) かもく(課目)
 かいぎ(会議) かいが(絵画) こうかい(後悔)
 はかい(破壊) かいすう(回数) きかい(奇怪)
 ゆかい(愉快) かくとく(獲得) かくだい(拡大)

かつどう(活動) こうかつ(狡猾) かんげい(歓迎)
 かんり(官吏) きかん(帰還) いっかん(一貫)

二、ぐわをがと書くもの

がれき(瓦礫) がしょう(臥床)
 がいこく(外国) 『いちがつ(一月)』
 がんり(元利) がんやく(丸薬) こんがん(懇願)

第三 ぢ、づはじ、ずと書く。

例

一、ぢをじと書くもの

あじ(味) ふじ(藤) わらじ(草鞋)
 ねじる(捻ぢる) はじる(恥ぢる) よじる(攀ぢる)
 じぞく(持統) じ(持) 『じく(軸) じんち(陣地)』
 じょせい(女性) さくじょ(削除)

二、づをずと書くもの

うずら(鶉) うず(渦) みず(水) ゆずる(譲る)
 うずめる(埋める) さずける(授ける)
 めずらしい(珍らしい) はずかしい(恥かしい)
 しずかに(静かに) まず(先づ)』

だいず(大豆) ずじょう(頭上)
 さんずのかわ(三途の川) ずが(図画)
 たよし

(1) 二語の連合によって生じたぢ、づは、ぢ、づと書く。

例

はなぢ(鼻血) もらいぢち(もらひ乳)
 ひぢりめん(緋縮緬) ちかぢか(近々)
 みそづけ(味噌漬) みかづき(三日月)
 ひきづな(引綱) つねづね(常々)
 いれぢえ(入智慧) ちゃのみぢゃわん(茶飲茶碗)

(2) 同音の連呼によって生じたぢ、づは、ぢ、づと書く。

例

ちぢみ(縮み) ちぢむ(縮む) つづみ(鼓)
 つづら(葛籠) つづく(続く) つづる(綴る)

第四 ワに発音されるはは、わと書く。たよし助詞のはは、はと書くことを本則とする。

例

かわら(瓦) かわ(河) にわ(庭)
 あらわす(著す) まわる(廻る) こわれる(毀れる)
 あらわない(洗はない) あつかわない(扱はない)

うたわ^{ウタ}ない(歌^{ウタ}はない)』かわいら^{カワ}しい(か^カはいら
しい) くわ^{クワ}しい(詳^{クワ}しい) けわ^ケしい(険^{ケン}しい)』
にわか^{ニワカ}に(俄^{ニワカ}かに) すなわ^{スナ}ち(則^{スナ}ち)』びわ^{ビワ}(琵琶^{ビバ})
びわ^{ビバ}(枇杷^{ビバ})

第五 イに発音されるひは、いと書く。

例

うぐい^{ウグ}す(鶯^{ウグ}) たい^{タイ}(鯛^{タイ}) はい^{ハイ}(灰^{ハイ}) いいわけ^{イイ}(言^イ訳^{ワケ})』
つ^ツいや^ツす(費^ツす) たいら^{タイ}げる(平^{タイ}げる)』
なら^ナい^ラます(習^ナひます) おも^オい^モます(思^オひます)
した^シが^タい^マす(従^シひます)』ち^チい^{サイ}い(小^チさい)
こ^コい^シい(恋^コしい) つ^ツい^ニ(遂^ツに)

第六 ウに発音されるふは、うと書く。

例

あら^{アラ}う(洗^{アラ}ふ) ま^マう(舞^マふ) あ^アう(合^アふ) か^カう(買^カふ)
う^ウた^ウう(歌^{ウタ}ふ) し^シな^ウう(撓^シふ) い^イう(言^イふ)
く^クう(食^クふ) す^スう(吸^スふ) ぬ^ヌう(縫^ヌふ) ゆ^ユう(結^ユふ)
く^クる^ウう(狂^クふ) あ^アら^ソう(争^アふ) う^ウけ^オう(請^{ウケ}負^オふ)
お^オも^ウう(思^オふ) あ^アや^ウう(危^{アヤ}い)

第七 オに発音されるふは、おと書く。

第八 エに発音されるへは、えと書く。たゞし助詞のへは、へと書くことを本則とする。

例

あ^アお^イい(葵^{アヲヒ}) あ^アお^グぐ(仰^{アヲ}ぐ) あ^アお^ルる(煽^{アヲ}る) た^タお^スす(倒^{タヲ}す)
か^カえ^ルる(蛙^{カヘル}) い^イえ(家^{イヘ}) ま^マえ(前^{マヘ}) か^カん^ガえ(考^{カンガヘ})
か^カえ^ルる(帰^{カヘ}る) さ^サえ^ズる(嚙^{サヘツ}る)』
す^スく^エえ(救^{スク}へ) ひ^ヒろ^エえ(拾^{ヒロ}へ)』さ^サえ(助^サ詞^サさへ)

例

い^イき^おい(勢^{イキホヒ}) か^カお(顔^{カホ}) し^シお(塩^{シホ}) に^ニお^い(匂^{ニホヒ})
お^オお^かみ(狼^{オホカミ}) お^オお^やけ(公^{オホヤケ}) こ^コお^り(氷^{コホリ})
こ^コお^ろぎ(蟋^{コホロギ}蟀^キ) ほ^ホお^ずき(酸^{ホホヅキ}漿^キ) ほ^ホお(頬^{ホホ})
ほ^ホお(の^ノき^キ) 朴^{ホノノキ}木^キ) も^モよ^おし(催^{モヨホ}し)』
な^ナお^す(直^{ナホ}す) し^シお^おせ^る(為^シ遂^{オホ}せる)
と^トど^こお^る(滞^{トドロコホ}る) と^トお^る(通^{トホ}る)』お^オお^い(多^{オホ}い)
お^オお^きい(大^{オホ}きい) と^トお^い(遠^{トホ}い)』な^ナお(猶^{ナホ})
エの長音は、ゆうと書く。

一、 いうをゆうと書くもの

ゆう^{イウ}じん(友^{イウジン}人) ゆう^{イウ}げん(幽^{イウゲン}玄) ゆう^{イウ}びん(郵^{イウビン}便)

ゆうわく(誘惑) りゆう(理由) しょゆう(所有)
 ゆうぎ(遊戯) ゆうぜん(悠然) ゆうりよ(憂慮)

二、いふをゆうと書くもの
 とゆう(都邑)

三、ゆふをゆうと書くもの
 ゆうがた(夕方)

第十一 エ列長音は、エ列のかなにえをつけて書く。

例

ねえさん(姉さん) ええ(応答の語)

第十二 オの長音は、おうと書く。

例

一、あうをおうと書くもの。

おうか(桜花) ちゅうおう(中央) おうむ(鸚鵡)

二、わうをおうと書くもの

よおう(弱う) おうらい(往来) こくおう(国王)
 おうせい(旺盛) おうじ(皇子) おうごん(黄金)

おうし(横死)

三、あふをおうと書くもの

おうぎ(扇) おうみ(近江) おうとつ(凹凸)
 おうなつ(押捺) おうりょく(鴨緑江)

四、はうをおうと書くもの

あおう(逢はう) かおう(買はう) まおう(舞はう)
 こおう(強う)

第十三 コおよびゴの長音は、こう、ごうと書く。

例

一、かうをこうと書くもの

こうじ(麴) こうがい(筭) こうべ(神戸)
 さこう(咲かう) きこう(聞かう)

こうばしい(かうばしい) あこう(赤う) ちこう(近う) こう(斯う)

こううん(好運) こうりよ(考慮) ほうこう(方向)
 しゅうこう(酒肴) こうすい(香水) こうぎ(講議)

こうざん(高山) こうかい(航海) こうふく(幸福)
 こうか(効果) こうつう(交通) こうふく(降伏)

二、くわうをこうと書くもの

こうせん(光線) こうだい(宏大) こうきょう(広狭)
 こうしよく(黄色) こうぞく(皇族) こうてん(荒天)

三、かふをこうと書くもの

こうおつ(甲乙) たいこう(太閤) こうかく(岬角)

四、こふをこうと書くもの

こう(劫) ×

五、がうをこうと書くもの

いそこう(急がう) 『なこう(長う)』

ほんこう(番号) さいこう(西郷)

こういん(強引) ぶんこう(文豪)

こうぜん(傲然) ×

六、くわうをこうと書くもの

こうこう(轟々) ×

七、がふをこうと書くもの

いちこう(一合)

八、ごふをこうと書くもの

えいこう(永劫) × ざいこう(罪業)

第十四 ソおよびゾの長音は、そう、ぞうと書く。

例

一、さうをそうと書くもの

はなそう(話さう) かえそう(返さう)

ちらそう(散らさう) 『あそう(浅う)』 そう(然う) 『

そうじ(掃除) いっそう(一双) そうが(爪牙) × ×

そうちよう(早朝) そうい(相違) そうこ(倉庫)

じゅうそう(重曹) × そうねん(壮年) たいそう(体操)

二、さふをそうと書くもの

さうもく(草木) そうどう(騒動) そうとう(争鬪)

さうしつ(喪失) そうしき(葬式)

さうろう(候ふ) 『そうわ(挿話)』 ×

三、ぎうをぞうと書くもの

せいぞう(製造) ぞうしよ(蔵書) ぞう(象)

しょうぞう(肖像)

四、ざふをぞうと書くもの

ぞうきん(雑巾) ×

第十五 トおよびドの長音は、とう、どうと書く。

例

一、たうをとうと書くもの

とうげ(峠) たとうがみ(畳紙) 『

うとう(打たう) かとう(勝たう) たとう(立たう) 『

いとう(痛う) かとう(堅う) 『

とうけん(刀剣) とうしよ(島嶼) × とうぼつ(討伐)

とうぞく(盗賊) さとう(砂糖) とうぜん(当然)

ねっとう(熱湯) おうとう(桜桃) とうき(陶器)

きとう(祈禱) × ついと(追悼)

二、たふをと(う)と書くもの

とうべん(答弁) × とう(塔) × とうは(踏破)

すいと(う)と書くもの

三、だうを(う)と書くもの

どうろ(道路) × とうとう(講堂) × かいとう(海棠) ×

ぶどう(葡萄) × ×

第十六 ノの長音は、のうと書く。

例

一、なうを(う)と書くもの

しのう(死なう) 『あぶのう(あぶなう)』

だいのう(大脳) × くのう(苦惱) × のうちゅう(囊中) ×

二、なふを(う)と書くもの

のうに(う)と書くもの

三、のふを(う)と書くもの

きのう(昨日)

第十七 ホおよびポ、ポの長音は、ほう、ほう、ほうと書く。

例

一、ほうを(う)と書くもの

ほうき(箒) × ほうむる(葬る) ×

ほうご(報告) × ほうか(邦家) × ほうほう(国宝) ×

ほうさく(方策) × ほうかつ(包括) × ほうび(褒美) ×

二、はふ(またはほふ)を(う)と書くもの

ほうる(投る) × ほうりつ(法律) × ほうし(法師)

三、ほうを(う)と書くもの

はっほう(八方)

四、ぽふ(またはほふ)を(う)と書くもの

りっほう(立法) × せっほう(説法)

五、ほうを(う)と書くもの

あそほう(遊ぼう) × とほう(飛ぼう)

はこほう(運ぼう) × 『ほうどう(暴動)』 × ほうけん(冒険)

ほうず(坊主) × しょうほう(書房) × めっほう(滅亡)

きほう(希望) × ほうちゅう(膨脹)

六、ばふ(またはほふ)を(う)と書くもの

びんぼう(貧乏)

第十八 モの長音は、もうと書く。

例

一、まうを(う)と書くもの

もうける(儲ける) × もうす(申す) ×

やすもう(休まう) × たのもう(頼まう) ×

あもう(甘う) × せもう(狭う) ×

もうはつ(毛髪) × もうどう(妄動) × もうもく(盲目) ×

ほんもう(本望) もうまく(網膜)

第十九 ヨの長音は、ようと書く。

例

一、やうをよう^{ヤウヤウ}と書くもの

ようか(八日) 『はよう(早う)』 ようやく(漸く) 『

ようもう(羊毛) かいよう(海洋) ようしき(様式)

たいよう(太陽) ようりゆう(楊柳)

二、えうをよう^{エウヤウ}と書くもの

ようりよう(要領) にちよう(日曜)

ようはい(遙拝) ようきよく(謡曲) ようねん(幼年)

ようせつ(夭折)

三、えふをよう^{エフヤウ}と書くもの

こうよう(紅葉)

第二十 ロの長音は、ろうと書く。

例

一、らうをろう^{ラウヤウ}と書くもの

いのろう(祈らう) かえろう(帰らう) 『

くろう(暗う) かるう(辛う) あろう(粗う) 『

ろうじん(老人) ろうどう(労働) めいろう(明朗)

ろうか(廊下) たろう(太郎)

二、らふをらう^{ラフヤウ}と書くもの

ろうそく(蠟燭) きゅうろう(旧臘)

第二十一 キュおよびギユの長音は、きゅう、ぎゅうと書く。

例

一、きうをきゅう^{キウキウ}と書くもの

おおきゅう(大さう) 『きゅうよう(休養)』

きゅうりよう(丘陵) えいきゅう(永久)

ようきゅう(要求) きゅうてき(仇敵) きゅう(灸)

二、きふをきゅう^{キフキウ}と書くもの

きゅうむ(急務) きゅうだい(及第) こきゅう(呼吸)

かいきゅう(階級) かんきゅう(感泣)

きゅうよ(給与)

三、ぎうをぎゅう^{ギウキウ}と書くもの

ぎゅうにゅう(牛乳)

第二十二 シュおよびジユの長音は、しゅう、じゅうと書く。

例

一、しうをしゅう^{シウシウ}と書くもの

しゅうと(舅) しゅうとめ(姑) 『

あたらしゅう(新しう) すすしゅう(涼しう) 『

しゅうよう(修養) しゅううん(舟運)』

しゅうじん(囚人) ゆうしゅう(優秀)

しゅうぎょう(就業) しゅうにゅう(収入)

しゅうき(臭気) ばんしゅう(晩秋)

きゅうしゅう(九州) しゅうちゅう(酋長)

しゅうい(周囲) こんしゅう(今週)

二、しふをしゅうと書くもの

しゅうとく(拾得) しゅうちやく(執着)

しゅうちゅう(集中) しゅうめい(襲名)

れんしゅう(練習) へんしゅう(編輯)

三、じゅうをじゅうと書くもの

じゅうなん(柔軟) じゅうるい(獸類)

四、じふをじゅうと書くもの

じゅう(十) ぼくじゅう(墨汁) じゅうき(什器)

五、ぢゅうをじゅうと書くもの

じゅうやく(重役) じゅうきよ(住居)

まんじゅう(饅頭)

第二十三 チュの長音は、ちゅうと書く。

例

一、ちゅうをちゅうと書くもの

はくちゅう(白昼) ちゅうぞう(鑄造)

ちゅうたい(紐帯) うちゅう(宇宙)

ちゅうしゅつ(抽出) せいちゅう(掣肘)

第二十四 ニュの長音は、にゅうと書く。

例

一、にゅうをにゅうと書くもの

にゅうわ(柔和)

二、にふをにゅうと書くもの

にゅうがく(入学)

第二十五 ヒュおよびビュの長音は、ひゅう、びゅうと書く。

例

一、ひゅうをひゅうと書くもの

ひゅうが(日向)

二、びゅうをびゅうと書くもの

ごびゅう(誤謬)

第二十六 リュの長音は、りゅうと書く。

例

一、りゅうをりゅうと書くもの

りゅうい(留意) せんりゅう(川柳)

りゅうこう(流行)

二、りふをりゅうと書くもの

こんりゅう(建立) いちりゅう(一粒)

第二十七 キヨおよびギヨの長音は、きょう、ぎょうと書く。

例

一、きやうをきょうと書くもの

きょうたん(驚嘆) キヤウタン ねっきょう(熱狂) ネツキヤウ

きょうだい(兄弟) キヤウタイ きょうそう(競走) キヤウソウ

きょうだい(鏡台) キヤウダイ きょうりよく(強力) キヤウリヨク

とうきょう(東京) トウキヤウ きょうもん(経文) キヤウモン

こきょう(故郷) コキヤウ きょうおう(饗応) キヤウオウ

二、けうをきょうと書くもの

きょうごう(校合) ケウガウ きょういく(教育) ケウイク

てつきょう(鉄橋) テツケウ きょうぼく(喬木) ケウボク

三、けふをきょうと書くもの

きょう(今日) ケフ きょうい(脅威) ケフキ きょうりよく(協力) ケフリヨク

きょうき(峽気) ケフキ

四、ぎやうをきょうと書くもの

しゅぎょう(修行) シュギヤウ にんぎょう(人形) ニンギヤウ

五、げうをきょうと書くもの

こんぎょう(今晚) コンゲウ きょうしゅん(堯舜) ゲウシュン

六、げふをきょうと書くもの

ぎょうむ(業務) ゲフム

第二十八 シヨおよびジヨの長音は、しゅう、じゅうと書く。

例

一、しやうをしょうと書くもの

しょうじき(正直) シヤウヂキ しょうばい(商売) シヤウバイ

しょうさい(詳細) シヤウサイ ふしょう(負傷) フシヤウ

いっしょう(一生) イツシヤウ しょうか(唱歌) シヤウカ

しょうらい(将来) シヤウライ ぶんしょう(文章) ブンシヤウ

二、せうをしょうと書くもの。

まいりまししょう(参りませう) マイキ

よいでしょう(よいでせう) 『

しょうせつ(小説) セウセツ しょうねん(少年) セウネン

しょうそく(消息) セウソク しょうしゅう(召集) セウシウ

しょうだい(招待) セウダイ しょうめい(照明) セウメイ

びしょう(微笑) ビセウ しょうしつ(焼失) セウシツ

あんしょう(暗礁) アンセウ

三、せふをしょうと書くもの

こうしょう(交渉) カウセフ さいしょう(妻妾) サイセフ

しょうけい(捷徑) セフケイ

四、じやうをじょうと書くもの

じょうず(上手) ジヤウズ かんじょう(感情) カンジヤウ

じょうたい(状態) ジヤウタイ じょうほ(讓歩) ジヤウホ

じょうじゆ(成就) ジヤウジユ じんじょう(尋常) ジンシヤウ

五、ぢやうをじやうと書くもの

しじやう(市場) れいじやう(令嬢) じやうぶ(丈夫)

じやうせき(定石) じやう(錠)

六、ぜうをじやうと書くもの

じやうぜつ(饒舌) そうじやう(騷擾)

七、でうをじやうと書くもの

さんじやう(三条)

八、でふをじやうと書くもの

ろくじやう(六畳) いちじやう(一帖)

第二十九 チョの長音は、ちやうと書く。

例

一、ちやうをちやうと書くもの

ちやうかい(町会) ちやうたん(長短)

ちやう(腸) ちやうしゆ(聴取) ちやうちん(提燈)

いっちやう(一挺)

二、てうをちやうと書くもの

ちやうでん(弔電) ちやうるい(烏類)

ちやうしよく(朝食) ぜんちやう(前兆)

ちやうし(調子) ちやうこく(彫刻)

三、てふをちやうと書くもの

ちやう(蝶) つうちやう(通牒)

第三十 ニョの長音は、にやうと書く。

例

一、ねうをにやうと書くもの

にやう(尿)

第三十一 ヒョおよびビョの長音は、ひやう、びやうと書く。

例

例

一、ひやうをひやうと書くもの

ひやうばん(評判) ひやうそく(平仄)

二、へうをひやうと書くもの

ひやうり(表裏) にひやう(二俵) とうひやう(投票)

ひやう(豹)

三、びやうをびやうと書くもの

びやうぶ(屏風) びやうき(病氣) びやう(鉞)

四、べうをびやうと書くもの

びやうしや(描写) れいびやう(靈廟)

第三十二 ミョの長音は、みやうと書く。

例

一、みやうをみやうと書くもの

みやうにち(明日) じゆみやう(寿命)

みやうだい(名代) みやうが(冥加)

二、めうをみょうと書くもの

みょうぎ(妙技) みょうじ(苗字)

第三十三 リョの長音は、りょうと書く。

例

一、りやうをりょうと書くもの

ぜんりょう(善良) りょうほう(兩方)

りょうど(領土) せいりょう(清涼)

りょうさつ(諒察) ぶんりょう(分量)

二、れうをりょうと書くもの

りょうり(料理) しゅうりょう(終了)

かんりょう(官僚) りょう(寮) せきりょう(寂寥)

ぶりょう(無聊)

三、れふをりょうと書くもの

りょう(獺)

注意 一

「クワ・カ」「グワ・ガ」および「ヂ・ジ」「ヅ・ズ」をいい分けて
いる地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。

注意 二

語例の下に示した漢字中、当用漢字表外のものには×印をつ
けた。また漢字の右側につけた片かなは旧かなづかいを示
す。

「備 考」

第一 ア列長音は、ア列のかなにあをつけて書く。

第二 イ列長音は、イ列のかなにいをつけて書く。

第三 ウ列長音は、ウ列のかなにうをつけて書く。

第四 エ列長音は、エ列のかなにえをつけて書く。

第五 オ列長音は、オ列のかなに^ウをつけて書くことを本則とする。

第六 ア列拗音の長音は、ア列拗音のかなにあをつけて書く。

第七 ウ列拗音の長音は、ウ列拗音のかなに^ウをつけて書く。

第八 オ列拗音の長音は、オ列拗音のかなに^ウをつけて書くことを本則とする。

第九 拗音をあらわすには、や、ゆ、よを用い、なるべく右

下に小さく書く。

第十 促音をあらわすには、つを用い、なるべく右下に小さく書く。

〔参考一〕 「現代かなづかい」に関する主査委員

長報告

安藤 正次

一、

かなづかいに関する主査委員会の経過ならびに審議の結果を御報告申し上げます。

まず申し上げるべきのは、本委員会の組織についてであります。本委員会は、はじめ、有光、時枝、山本、神保、金田一、清水、河合、井手、藤村、小幡、安藤の十一委員で組織されたのでありますが、その後さらに、東条、松坂、佐伯、石黒、岩淵、西尾、服部、宮川の入委員を加えまして、計十九名となりました。主査委員長は皆さまの御推薦によりまして、わたくしがその任に当ることになりました。

委員会は、六月十一日を第一回といたしまして、九月のはじめまでに会合をかさねること十二回、慎重審議の末、ようやく成案を得ましたので、ここにこれを「現代かなづかい」と名づけて、御報告申し上げますと相成ったのであります。本日これについて御報告申し上げますに当りまして、終始一貫、この仕事に御協力をたまわった委員各位をはじめ、幹事書記の方々の御労苦に対して、深い感謝の念を表せざるを得ません。御手もとにごぞいます「現代かなづかい」の一編は、この御労苦の成果にほかならないのであります。

二、

さて、次に申し上げたいのは、本委員会はかなづかいというものをどう考えたか、これが審議に当ってどういう態度をとったか、これが処理についてどういう方針をたてたかということであります。

かなづかいの問題は、国語国字に関する他の諸問題と同じく明治初年以來の懸案であり、しかも未解決のまままで今日に及んでいることは御承知の通りであります。国語審議会が今回この問題を取りあげて委員会に付託されるに至りましたのも、これが単に漢字の制限と不可分の関係をもっているということばかりからでなく、これが解決はまた、書き言葉の簡易化の一環として、教育上の負担の軽減、一般民衆の知能の向上に重要な関係をもち、ひいては、国語の改革という大きな問題にも影響を及ぼすがゆえと存ぜられるのであります。この意味において、本委員会もまた、この問題を取りあつかうに当っては、十分になづかいの本質を考慮いたしまして、一面には応急の処理を講じながらも、また他の一面においては、未来への展開に違算のないよう、国語の進運をたすけることのできるようにとの心がまえをたてた次第であります。

まず、かなづかいというものにつきましましては、国語をかなで書く場合の準則がかなづかいであると解する大体論は、おそらく何人も異存のないことと考えますが、その準則のも

とづくところをいづれにおくかを古にもとめるか、今にもとめるかにおいて、諸家の意見はかならずしも一つに帰してないのであります。

現在、学校の教科書などに採用されております、かなづかいは、復古かなづかいかしくは古典かなづかいとよばれておりますように、その準則のよりどころをいにしえにおいております。これは、平安朝の言文二途にわかれなかった時代の文献に見えているかな書きの実績をよりどころとして、帰納的にそれぞれの言葉を書く場合の準則をさだめたものであります。平安朝の言葉に関する限り、これが権威は十分に認められて然るべきであります、さてこれが後代にまでその準則の力をおよぼしうべきかどうかは疑問であります。

これより以前、奈良朝にもその時代の国語を象徴するかなづかいの存在していたことが帰納的に認められております。学者のいわゆる特殊かなづかいの如きは、ことに顕著なものであります、それも、言葉における音韻の識別とその消長を一つにしておりまして、その拘束の力は後代に及んでいないのであります。これが自然の理法であります。

しかしながら、あるいはまた、平安朝のかなづかいは、当代におけるかなの弘通にともなつて定着性をもつようになつたばかりでなく、この時代のかな文化は遠く後世にその影響を及ぼしているから、それらの点から見て、今においてもな

お、この時代のかなづかいは一般の準則として認められる資格をもつという説もあるかも知れません。しかし、平安朝はいかにもかな文学の盛であった時代にはちがいありませんが、それは社会のある階層においてであったといつてもよいのであって、一般の社会人は、日記録体の文章、尺牘往来体の文章あるいは漢詩文などに親しむことが多いというのが当時の実情であったと思われませんが、こういう各種文体の対立とわが国字が元来複国字制で、漢字で書いてもよく、かなで書いてもよく、そのかなも平がな片かなのいずれでもよいことになっていゝのと相まって、かなづかいに定着性を与えるような余裕はなかつたことゝ考えられます。むしろさういう次第から、書かれた字面と語られる言葉とは常に遊離した状態におかれたので、それゆゑにこそついに言文相わかれることにもなつたのであります。鎌倉時代の普通に定家かなづかいといわれている「行阿仮名文字遣」のできた由来をたずね、またその内容をしらべてみましても、平安朝のかなづかいがこういう王朝文学の勢力圏内にある人々の間にすら、その規範の力をもち得なかつたことが知られます。

さらにまた、このかなづかいは、江戸時代の国学者の研究によつてはじめて明らかにされたことでも、これは裏書きされるのであります。

しかしながら、その江戸時代においても、このかなづかいは

は、わずかに一部の学者の間に信奉者(実践者)をもっていたに過ぎないし、明治時代に入つては、これが学校の教科にとり入れられて久しきにわたること前に述べた通りであります。が、七十年の歳月を経ていふにもかゝらず、まだまだ、かなづかいは定着性をもつことができず、あいかわらず遊離の状態におかれております。

以上のようないろいろの事実を、とり集めて考えてみますのに、わたくしどもは、現代の言葉をかなで書きあらわす場合の準則というものは、現実には何ももっていないといえるかと存じます。今までのかなづかひの準則と認められる、平安朝中期ごろまでの実績をよりどころとしたものは、これが言文二途にわかれた後までもずっと関係をもっているといいたしましても、それは、文語の系統に属すべきものなのであります。したがって現代においても、文語の範囲では今までのかなづかひを認めてよいと存じますが、口語体のものにおいて、今までのかなづかひによるのは不合理であります。その不合理がいろいろの問題を生んで居ります。口語の世界にあっては、口語それ自身のうちに、かなで書く場合の準則がもとめられるべきものと信じます。それが合理的であります。そこで委員会では、現代社会の実情と要求とに応じまして、今までのかなづかひに対して現代文の口語体のものに適用されるべき新しいかなづかひを制定するのがその当を得た

ことと考へたのでありますが、この制定に当りまして、準則のよりどころを今にもとめ、現代語の音韻意識によって書きわけれることを本体といたしましたことは申すまでもございせん。これを現代かなづかひと名づけましたのもこの意味からであります。

なお本委員会では、かなづかひの上に、字音国語の別を立てないことにいたしました。従来の字音かなづかひは、漢字の一字一字の字音を明らかにするのが主たる目的であるかに見られます。しかし、われわれの準則を見出そうとするのは、ひとしく国語としてうけとられるものについてであり、字音語を特に区別する必要がないからであります。

またここに一言しておくべきことは除外例についてであります。この種の準則には、除外例を設けない方が、とりあつかひの上からも、体制の上からも都合がよいのであります。が、かなづかひのような問題は、冷やかな理論だけで片づけられるものではありません。そこには国民感情や書記習慣の顧慮されなければならぬものがあります。本かなづかひに認めてあります除外例のうちには、伝統的の書記習慣をしばらく存しておくという類のものがあり、まだ一般的の書記習慣とはならないが、まずこれをとりあげておくという類のものがあり、かならずしも同様ではありませんが、要するにこれは、そこにどれだけかの余裕を存して国民の総意に訴えらる

いう意図に出でたものであります。その余裕は、要するに明日のための余裕であります。

三、

次に申し上げるべきは表記に関する通則についてであります。

表記に関する通則は、長音をあらわす場合拗音をあらわす場合、促音をあらわす場合の三つであります。

まず、長音をあらわすには、古くから、

阿にはア。伊にはヒ・イ。またはハ、

宇にはフ。またはウ。江にはイ・エ。またはヘ

於にはフ・ウ。またはヲ・オ。

をつかっております。このかなづかいでは、

阿にはア。伊にはイ。宇にはウ。江にはエ

於にはウ

を採用することにしたいたしました。これは主として伝統的の書記習慣を考慮したからであります。たゞし於の場合には、ウのほかにはオのつかわれたのもかなり古くからのことでもありますから、ウを書くのを本則としましてオの使用をも認めることにいたしました次第であります。

なお、長音符というべきものにーがあります。これは外国語をかきあらわす場合などに多くつかわれて居りますが、これもある範囲には認めてもよいかと存ぜられます。こうして

国民の選択にまつのも余裕をおくやり方であります。ーの使用も古くその例が無いのではありません。山槐記中山忠親治承二年正月十八日の条に

的懸マートーカケ如此仰也、マ字ト字間長、ト字カ字又同、カケ字サカケサカリ音ニ引ツムケ仰也、不召的懸名、とあります。新井白石は東音譜に側線をつかっております。

送声

送声者送気声也。不可混余声。本音不転以送其氣即送声也。

アイウエヲ カキクケコ
イイイイ

なお、長音のうちで問題となるべきのは、エ列の長音の場合であります。この場合のものは国語ではまれであります。「永遠」、「経営」のごときはエイ・ケイ・エイであるからその通りエイ・ケイ・エイとかくのを本体といたします。

拗音につきましては、や、ゆ、よを右下に小さく書くことを本体といたしました。古くキア、チャなどの例もありませんが、や、ゆ、よの方が普通であります。

拗音のうちにはくわ、ぐわの類がありますが、これは、このかなづかいでは、か、がに統一することにしたいたしました。

促音をあらわすには、やはり普通の慣習に従いました。右下に小さく書くことを本体といたしました。

拗音促音を右下に小さく書くことが印刷その他の関係で不可能である場合も考慮されております。

四、

次に本案の細目にわたつて御説明申し上げます。

(一) 全般的に音韻上の区別の失われているもの

第一 む、を、は、い、え、おと書く。たゞし助詞の
をを除く。

これは音韻上の区別の失われたものを一つにいたしましたので
あります。

和行のゐ、ゑ、を、は、現代においては、その音韻的特質を
失いまして、阿行のい、え、おと同じように発音されるので
ありますから、これをい、え、おに統一することにいたしました。
たゞ助詞のを、は、一方では古くからの書記習慣を顧慮
するといふ点から、一方では特に助詞専用のかなとして使う
のに他にまぎれるおそれがないといふ点から、これを存して
おくことにいたしました。

(二) 地域的に音韻上の区別の失われているもの

第二 く、わ、ぐ、わ、は、か、がと書く。

第三 ぢ、づはじ、ずと書く。

(三) 音韻の変化

第四——第九

これは、語中における波行音の問題であります。

波行動詞の活用

第六 二重母音

あらう

まう

(四) 長音

は、への除外

第九 二重母音

おおかみ

おおい

第十——第二十

△ゆう

△ええ

おう

こう

ごう

そう

ぞう

とう

どう

のう

ほう

ほう

ほう

もう

よう

ろう

いう

いふ

《ゆふ》

あう

わう

あふ

かう

くわう

かふ

がう

ぐわう

がふ

さう

さふ

ざう

ざふ

たう

たふ

だう

なふ

のふ(昨日)

のふ

ほう

はふ

ほう

ばふ

ほう

ぼふ

まう

まふ

やう

やふ

らう

らふ

字列

きゅう	ぎゅう	しゅう	じゅう	ちゅう	にゅう	ひゅう	びゅう	りゅう	きょう	ぎょう	しやう	じやう	ぢやう	ちやう	によう
きう	ぎう	しう	じう	ちう	にう	ひう	びう	りう	きやう	ぎやう	しやう	じやう	ぢやう	ちやう	ねう
きふ	ぎふ	しふ	じふ		にふ		りふ		けふ	げふ	せふ	ぜふ	でふ	てふ	

ひよう	びよう	みよう	りよう	ひやう	びやう	みやう	りやう	へう	べう	めう	れう	れふ
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----

五、

以上で、一応現代かなづかいに関する御説明を終えたのでありますが、ここに終りにのぞみまして、本主査委員会の当局に対する切なる要望を申し添えておきます。

前にも述べましたように、このかなづかいは、現代語をかなで書く場合の準則たるべきことを期したものでありまして、これが幸いに本総会の御賛同を得、広く世に行われることとなりますれば、書き言葉の簡易化に資することの多きはもちろん、教育上の負担の軽減、社会民衆の知能の向上に多大の影響を及ぼすことは、わたくしどもの深く信じて疑わざるところであります。わたくしどもは、さらにこの新しいかなづかひの制定を機として、このかなづかひに定着性を与え、これをりつぱな現代かなづかひにもり立て、行くことを念願するものであります。現代かなづかひはその準則のよりどころを現代語音にもとめていたのであります。示されている準則は簡単であり、ほとんど迷うところがないといえます。しかし、その簡単なもの、迷なしと思わるもの、かならずしも常にその通りにはなりません。現代語の教育を高め、

乎列

現代語の認識を強めるの要はここにあるのでありますが、うらむらくは、現下のわが国における現代語の調査研究はきわめて貧弱であります。広くこれを国語政策の立場からみましても国語教育の実際からみましてもこれを今日のままだに放任しておくのは文化国家の恥辱であります。標準語制定という大きな問題をはじめ各種の考査を要する問題が山積いたして居ります。それらの問題の基礎となるべき調査研究はゆるがせにすべきではありません。わたくしは端的に申し上げます。わたくしどもは、政府当局が速やかに有力な現代語の調査研究機関の設立に着手されることを要望するのであります。しかもこれは総合的の体制をそなえたものでなければならぬと存じます。これが根本の問題であります。以下申し述べる事からは、これからみますれば枝葉のことではあります。これが、これまた急を要する意味において申しそえることいたします。

その一つは、現代かなづかいは、文法体系に関係をもつことが少くないのでありますから、従来の口語文法の改訂について応急の処置を講ぜられたいこと。

その二つには、外国語をかなで書く場合の準則はこれに含まれていませんから、それについては別途委員会を設けて然るべく制定の方法を講ぜられたいこと。すでに国語になりきっている外来語が、現代かなづかいによるべきことはいうま

でもありません。

その三つは、送りがな法、わかち書き法、句読法などの制定もまた閉却されるべきでないこと等であります。

〔参考二〕 昭和二十三年三月 現代かなづかいの
文部省

要領

・ゴシックはとくに注意すべき点を示す。
・括弧内の漢字には当用漢字表以外のものも使っている。

「現代かなづかい」まえがき

- このかなづかいは、大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。
- このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに適用する。

一、原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。

原則

第一類

- 旧かなづかいのぬ、烈、をは、今後い、え、おと書く。

ただし、助詞「を」は、もとのままとする。

- 例 あい(藍) いる(居る) すいどう(水道) こえ(声)
うえる(植ゑる) こうえん(公園) とお(十)
あおい(青い) おんど(温度)

▼本を読む 字を書く

- 旧かなづかいのくわ、ぐわは、今後か、がと書く。

- 例 かがく(科学) かし(菓子) ゆかい(愉快)

がいこく(外国) いちがつ(一月)

- 旧かなづかいのぢ、づは、今後じ、ずと書く。

ただし、(イ)二語の連合によって生じたぢ、づは、もとのままとする。
の連呼によって生じたぢ、づは、もとのままとする。

- 例 ふじ(藤) はじる(恥ぢる) じ(痔) じしん(地震)

じょせい(女性) みず(水) ゆずる(譲る)

まず(先づ) ずつ(宛) なかんずく(就中)

さかずき(杯) きずく(築く) だいず(大豆)

ずが(図画)

▼(イ)はなぢ(鼻血) もらいぢち(もらひ乳)

ひぢりめん(緋縮緬) ちかぢか(近々)

いれぢえ(入知恵) ちゃのみぢやわん(茶飲茶碗)

みそづけ(味噌漬) みかづき(三日月)

ひきづな(引綱) つねづね(常々)

―ぢから(力) ―ぢょうちん(提灯) ―ぢょうし

(調子) ―づえ(杖) ―づか(塚・束・柄)

―づかい(使) ―づかえ(仕) ―づかみ(掴み)

―づかれ(疲れ) ―づき(付・搦) ―づく(付く)

―づくえ(机) ―づくり(作・造) ―づくし(尽し)

―づけ(付) ―づた(鳶) ―づたい(伝ひ)

―づち(槌) ―づつ(筒) ―づて(伝手)

―づつみ(包) ―づつみ(鼓) ―づとめ(勤)

一づま(妻・棲) 一づまる(詰まる) 一づみ(積)

一づめ(爪・詰) 一づよい(強い) 一づら(面)

一づらい(辛い) 一づり(釣) 一づる(鶴・弦・蔓)

一づれ(連)

▼(ロ)ちぢむ(縮む) ちぢらす(縮らす) つづみ(鼓)

つづら(葛籠) つづく(続く) つづる(綴る)

4. ワ、イ、ウ、エ、オに発音される旧かなづかいのは、ひ、ふ、へ、ほは、今後わ、い、う、え、おと書く。

ただし、助詞「へ」は、もとのままに書くことを本則とする。

例 かわ(川) あらわない(洗はない) すなわち(則ち)

たい(鯛) おもいます(思ひます) ついに(遂に)

いう(言ふ) あやうい(危い) まえ(前)

すくえ(救へ) さえ(さへ) かお(顔) なお(尚・猶)

こおり(氷) とおる(通る) おおい(多い)

おおきい(大きい) とおい(遠い) おおう(覆ふ)

おおかみ(狼) とどこおる(滞る) おおむね(概ね)

▼わたくしは では には とは のは からは

よりは のでは こそは までは ばかりは だけは

ほどは ぐらいは などは あるいは もしくは

おそろくは ねがわくは おしむらくは または

さては いずれは ついては

▼京都へ帰る ……さんへ

5. オに発音されるふは、今後おと書く。

例 あおい(葵) あおぐ(仰ぐ) あおる(煽る)

たおす(倒す)

第二類

1. エの長音は、ゆうと書く。

例 ゆうがた(夕方) ゆうじん(友人) りゆう(理由)

「備考」 「言ふ」は「いう」と書き、「ゆう」とは書かない。

2. エ列の長音は、エ列のかなにえをつけて書く。

例 ええ(応答の語) ねえさん(姉さん)

3. オ列の長音は、「おう」「こう」「そう」「とう」のように、オ列のかなにりをつけて書くことを本則とする。

例 おうじ(王子) おうぎ(扇) おうみ(近江)

かおう(買はう) こうべ(神戸) こう(斯う)

なごう(長う) いちごう(一合) はなそう(話さう)

そう(然う) そうろう(候々) ぞうきん(雑巾)

とうげ(峠) たとう(立たう) とう(塔)

きのう(昨日) ほうき(箒) ほうび(褒美)

りっぼう(立法) あそぼう(遊ばう) もうす(申す)

ようやく(漸く) たいよう(太陽) かえろう(帰らう)

ろうそく(蠟燭)

〔備考〕 「多い」「大きい」「氷る」「通る」「遠い」などは「おお

い」「おおきい」「こおる」「とおる」「とおい」「と書き」「おう

い」「おうきい」「こうる」「とうる」「とうい」「とは書かない。

第三類

ウ列拗音の長音は、「きゅう」「しゅう」「ちゅう」「にゅう」の
ようにウ列拗音のかなに「う」をつけて書く。

例 おおきゅう(大きゅう) きゅうよ(給与)

あたらしゅう(新しゅう) きゅうり(胡瓜)

きゅうしゅう(九州) じゅう(十) うちゅう(宇宙)

にゅうがく(入学) ひゅうが(日向) びゅう(誤謬)

りゅうこう(流行)

第四類

オ列拗音の長音は、「きょう」「しょう」「ちよう」「にょう」の
ように、オ列拗音のかなに「う」をつけて書くことを本則と
する。

例 とうきょう(東京) きょう(今日) こんぎょう(今晚)

しょうねん(少年) まいりましゅう(参りませう)

よいでしゅう(よいでせう) じょうず(上手)

ちよう(蝶) にょう(尿) ひょう(豹) びょう(鋏)

みょうにち(明日) みょうじ(苗字) りょうり(料理)

りょう(獵)

〔注意〕

1. 「クワ・カ」「グワ・ガ」「および」「ヂ・ジ」「ツ・ズ」をいい分
けている地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。
2. 拗音をあらわす「や」「ゆ」「よ」は、なるべく右下に小さ
く書く。
3. 促音をあらわす「つ」は、なるべく右下に小さく書く。

〔付〕 昭和三十一年七月 正書法について
国語審議会

正書法について(報告)

国語審議会は、広く正書法について考え、その立場から、特に現在教育上その他において問題となっている「現代かなづかい」の適用上の諸点について審議し、別紙「正書法について」のような結論に到達した。

(別紙)

正書法について

国語審議会は、昨三十年、中央教育審議会の答申「かなの教え方について」を審議した際、正書法その他国語国字の将来の方向について、あらためて検討することとしたのである。

戦後、「当用漢字表」「現代かなづかい」を制定した国語審議会は、さらに二十四年改組後、法令用語・標準語その他多くの問題を取り扱い、また「人名用漢字別表」「当用漢字補正案」などによって当用漢字の実行の円滑を期してきた。

今その第三期の任を終えるにあたり、漢字・かなづかいを含めて、日本語の表記の基準を求め、これまで個別的に行われてきた仕事の総まとめ、ないしは体系づけを考えてみるべき段階に至ったといえるであろう。

「当用漢字表」については、その目標や基盤の上に立って、

いっそう妥当性のあるものにしていかなければならない。そのため、たとえば「当用漢字表」外の漢字をもつ漢語については、その漢語の言いかえ、その漢字の同音の漢字による書きかえ等の整理を試みる。また「現代かなづかい」はもちろん発音のままのものでないから、この際その原則の適用において語意識ないし語構成ということを考えてみることも必要ではないかという見解に達した。

以上のことは正書法的な考え方によって解決の方途が求められるであろう。正書法(正字法)はオーソグラフィーの意味で使われているが、日本語の表記は漢字・かな(ひらがな・かたかな)を交えて書き、しかもその使用が比較的任意になりやすいから、厳密な意味での正書法は漢字・かなの表記であるかぎり、一定することがきわめて困難なことである。しかし、ひらがな・かたかななどの問題、漢字・かなづかい・送りかなを含めて、日本語の表記について正書法を考えてもさしつかえあるまい。あるいは、正書法の語を避けて、それを表記法といったほうがよいかもれない。その場合、一語一語についてそれを漢字で書くか、かなで書くか、かなはひらがなで書くか、かたかなを用いるか、あるいはどの部分を漢字で書き、どの部分をかなで書くかというふうに決めていく方法もあり、また、どういう種類の語を漢字で書き、あるいはそれもかなで書くか、特にかたかなで書くかというふうに原

則的なものをまず決めてみる方法もある。もっとも、漢字・かなの一つでしか書きようのないというようなものではなく、たとえば、「さくら」と書くのに、漢字・かなといろいろ書く場合があり、どういう場合にそれらを使うかという、使い方の基準が出てくればよいのである。

日本語については、すべての語について、かな書きをする場合もあるから、それも決めておかなければならない。

正書法は、もともと語の一定した書き表わし方であるから、新しく考える際は、一貫した法則によることが望ましい。どうしても一貫できないものについては例外を認めざるをえない。

「現代かなづかい」は、「大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則」であるから、その適用として示された中には、必ずしも現代語音にもとづかないものがある。「現代かなづかい」は歴史のかなづかいでないこととはもちろん、音韻表記としても徹底的なものではない。

「現代かなづかい」では、連濁・連呼の書き方、助詞の「は」「へ」「を」の書き方、オ列長音をめぐる「おう」「おお」の書き方、「言う」の書き方など、必ずしも表音的ではない。

かなづかいは語の表記であって、その語の表記によって語を認めるのである。その意味において、音韻表記の方式も語の意識によるものといえることができる。

語の意識は、それによってまた、特殊な用法のあるものを特に区別するとか(1)、同じような発音であってもその類を書き分けるとか(2)、語の構成に対する意識を書き方の上に表わすとか(3)することができる。

「現代かなづかい」における助詞の「は」「へ」「を」は、ワ・エ・オと発音するが、これは従来の書記習慣などを顧慮して本則としたものである。しかし、これも正書法としては、その妥当性が考えられよう(1)。

「現代かなづかい」におけるいわゆる長音の「おう」「おお」の類については、異なる発音かどうかの問題はある。しかし、従来辞書などに試みられた表音式かなづかいにおいて、漢語と和語による区別、また音節の個々に発音されるものと二音節の融合して発音される感じのあるものとの区別などによって別の類とされていたことでもあるし、したがって、これを書き分けることにしたのである(2)。

「言う」はユウという発音もあるが、「現代かなづかい」において「いう」とするのは、その語幹が動かないという意識によるものである。

「現代かなづかい」の二語の連合における連濁の「ぢ」「づ」の書き方は、語の構成意識をかなづかいの上に表わしたものであるが、しかし、二語とは「ぢ」「づ」に始まる語の語意識によって前後の部分が二つの部分からできている意識のあるな

しによって決まると考えられる。その意識は、後半を漢字で書く際の書き方、後半の語を含む語群との連想、その語と派生関係にあると思われる語との連想がささえとなる。

もっとも、これらのうち、「家中」「一日中」の「中」などは、「じゅう」とすることに多少問題はあるが、しかし、ジュウと発音するものの中に「ぢゅう」と書かなければならない語がないから、「じ」と書いてもよいことになる。のみならず、「家中」「一日中」の「中」は、いっばいの意味を添える接尾辞に転じて、語原とは離れてきているから、語原によらず「じゅう」と書いてもさしつかえない③。

このように、語意識というものを導入すれば、「現代かなづかい」の中の難点といわれるものに対して説明がつき、「現代かなづかい」の適用もいっそう合理的に扱えることになる。これは、「現代かなづかい」が歴史的かなづかいの体系にもどることではなくて、音韻表記の性格を保ちつつ、われわれの現代日本語の語意識を基としようとするわけである。

「現代かなづかい」の連濁の問題点について具体的に説明すれば、次のようになる。

「ぢ・じ」「づ・ず」の書き分けについて、語意識の考えを導入し、疑問の語を処理してみると、「二語の連合によって生じたぢ・づはぢ・づと書く。」という場合の「二語の連合」ということばは、その解釈に幅をもたせる必要が生じてくる。二

語の連合といつても、必ずしも独立する語どうしの結びつきに限らず、接頭辞・接尾辞のような接辞と独立が明らかかな語との結合をもその中に入れて考えられる。こう考えてくると、現代語として語構成の分析的意識がある場合には、ぢ・づと書くことになる。このときは、漢字の連想を伴う場合もある。

以上の考え方に従えば、たとえば次の語にはぢ・づを使うことになるであろう。

あいそづかし	あいそをつかす
かたづく	かたをつける
くちづて	つてを求める
ひとづて	
たづな	つな
けづめ	つめ
こぢんまり	ちんまり
こづく	つく
こづかい	つかい
こづくり	つくみ
くにつくし	つくす
むしづくし	

また、次のような語は、現代語としては、語構成の分析的意識のないものと考えられよう。したがって、これらには、ぢ・づを使うことになるであろう。

かたず

*ぬかずく

みみずく

さしずめ

おとずれ

さかずき

つまずく

いなずま

かしずく

ひざまずく

なかんずく

あせみずく

*きずな

うなずく

しおじ

うでずく

ちからずく

きぬずくめ

おのずから

てずから

いえじゅう

せかいじゅう

つ(唾)

つく(突)

づく(木菟)

つめ(詰)

つれ(連)

つき(坏)

つく(突)

つま(妻)

つく(付)

つく(突)

つく(就)

つく(漬)

つな(綱)

ち(路)

つく(尽)

ちゅう(中) (注)「ちゅう」と書く場合はない。

語構成の分析的意識は、現状においてはかなり個人差のあるものであるから、以上の判定についても見解の相違はある。 (たとえば、特に、*印をつけてあるものごとき。)し

かし、「現代かなづかい」を前提とすれば、この程度の判定を認めることによって正書法の解決に一步近づくことができるであろう。

今期の国語審議会においては、かなの学習についてかたかなの教え方を正書法の問題として位置づけたが、さらに「現代かなづかい」の適用上の問題点を考え、また、「当用漢字表」による漢字の置きかえについても、その一部について成案を得たわけである。

われわれは正書法の確立について、今後さらに広く実践と研究が行われることを期待するものである。

(原文は左横書き)

